

波照間島現地調査報告書

- ムシャーマにみる波照間アイデンティティの形成 -

1. テーマ設定の理由

波照間島は八重山諸島の中でも特に民俗学的な行事やまつりが豊富であり、現在でも多くの行事・まつりが行われている。特に、波照間島のムシャーマ（旧盆の祭り）やプーリィ（島の豊年祭）は有名である。また、波照間島は大変信心深い島としても知られている。このような島の世界観については文化人類学、民俗学、宗教学といった様々な立場から、沖縄の世界観を研究する鍵として調査・研究がなされてきた。

今回、竹富町社会科副読本作成の第一の目標は、波照間島における村落単位の行事と教育の関係性を探ることにある。波照間島では、村の人々が一丸となって行事やまつりに参加し、これを通じて島の子どもたちに島の文化や伝統を継承し、島の行事に参加することが子どもたちのアイデンティティ形成の土台にもなっているのではないかと考えたためである。今回の調査では、波照間島の人々が行事やまつりを通じて波照間島民というアイデンティティを形成・確立していく過程を浮き彫りにすることを目標とする。

2. ムシャーマとは

ムシャーマとは、ソーリン（精霊祭）の中日（旧暦7月14日）の豊年祈願を中心とする仮装行列と、テーク（太鼓）、ポー（棒）、ニンブチャー（念仏踊）、シーシンボー（獅子の棒）、シーシー（獅子舞）等の公民館の中庭における演目や舞台での舞踊、狂言などの民俗芸能の総合祭典をいう。

ムシャーマの語源は不明である。「ムッサーハー（面白いこと）」からムシャーマと言うようになったという説や、かつて中国または南方で「ムシャー（武者、猛者、亡者かは不明）」なる者がいて、それに関わる祭りだとする説もあるが明らかではない。

ムシャーマの際、島の五つの村落は東（北・南）、西（富嘉・名石）前の三組に分かれる。以前は東と西の二つであったが、綱引きの勝負や旗頭の優劣で喧嘩が絶えなかつ

た上、同じ村落でありながら二つに引き裂かれていた前村落から独立を求める声もあり、現在のように三つに分かれることになった。今年（平成14年）のムシャーマは、前が独立して百周年を迎えるという。

ムシャーマの内容とその役割は、大きく三つに分けられる。一つ目は、神仏への豊年祈願と祖霊への供養により、神仏や祖霊に対する島民の信仰を固め、人々の統一をはかることである。二つ目は、ツカサや役人、老人への尊敬と感謝並びに島外居住者も含めた全ての島民の慰安と娯楽などのための、島をあげ、村をあげての民俗芸能の総合祭典である。三つ目は、全島民が一斉に集まり、全島民の連帯と団結をはかるとともに、民俗芸能の啓発と教育文化の推進並びに健康長寿の促進をはかるなどの教育的、行政的な役割を持つ総合祭典でもある点にある。

3. 波照間島民とムシャーマの関係

波照間島で生まれ育った者は、その成長過程でムシャーマの行列や中庭、舞台の演目の中から、それぞれの年代にふさわしい演目に参加する。島の子どもたちは、ムシャーマにおいてはそれぞれの年齢に応じた役割を当てられている。

年齢・世代・性別によるムシャーマの参加演目の移り変わり

よちよち歩き（2～3歳）…ミルクンタマ（弥勒の子ども）

小学校低学年…マミドーマ（豆どうま）、ミルクヌナーリ（弥勒の実）

小学校高学年…男子 - 旗持ち（大旗、幟旗）、テーク（太鼓）
女子 - 行列の各踊り

中学校男子…男子 - テーク（太鼓）、ポー（棒）、シーシンポー（獅子の棒）
女子 - 行列の各踊りから舞台での舞踊へ

青年会…シーシンポー（獅子の棒）、シーシー（獅子舞）

婦人会…舞台での舞踊（「波照間島節」、「夜雨節」、「祖平花節」、「波照間口節」、「世果報節」などは竹富町の無形民俗文化財に指定されている。）

老人…弥勒節

よちよち歩きの子どもはミルクンタマ(弥勒の子ども)に出て、小さい旗を持ちながらサーンサーンブヤー(弥勒節に合わせてゆっくりひざを曲げながら歩くこと)をする。小学生になるとマミドーマ(豆どうま)やミルクヌナーリ(弥勒の実)、小学校高学年から中学生くらいになると旗持ち、テーク(太鼓)、高校生や青年はボー(棒)、青年はシーシ(獅子)、婦人は舞踊、老人は弥勒節という具合になっている。全ての島民はそれぞれの成長過程にふさわしい演目を受け持ち、ムシャーマとともに成長し、ムシャーマとともに年老いていくようなものであるという。

4. ムシャーマを中心とする島の行事への参加は義務か

波照間島の人々は、島の行事には必ず参加する。行事への参加は義務とまではいえないが、参加しないと気まずい思いをするという。昔は行事に参加しない人からは罰金を取ったりもした。今はそこまではしないものの、島の行事には必ず参加せざるをえない状況になっている。それぞれに役割が当てられるので、特に理由がない限りはみんな参加するという。

5. 島出身の島外居住者とムシャーマ

波照間島最大の祭りであるムシャーマには、島出身の島外居住者も参加する。島出身者はたとえ島外や県外に出ても、島の行事の際にはほとんど必ず帰って来る。しかし、せっかく島に帰って来ても行事には参加せず、高見の見物をする人が多くなった。そのような人に対し昔はよく注意をしたが、今はあまりうるさく言わないようにしているという。島の人々は島外居住者に対して、「お客さん」になってしまうと、集団の連帯意識が薄れてしまうのではないかという危機感を抱いている。

6. 島外出身者・観光客とムシャーマ

波照間島に心を奪われて島外や県外からやって来た人々は、積極的に島の行事に参加する。このような人たちの方が島の行事に喜んで参加するという。かつては島の間人とうしの結婚が圧倒的に多かったが、今は島の人と島外から来た人が結婚するのがほとんどである。いわゆる「ナイチャ-嫁」はよく働く上、島の行事にも積極的に参加するので、島の人々は「ナイチャ-嫁」は大歓迎だという。

また、観光客もムシャーマに積極的に参加する。ムシャーマに参加するために毎年島

に訪れる人もいる。島の人々は、ただ祭りを見物するだけじゃなくて、観光客にも一緒に参加して欲しいと考えている。島は過疎化が進んでいるので、観光客がムシャーマに参加するのはとても良いことで、これを通じて波照間に移り住むようになってくれば、という気持ちもあるという。観光客は、神行事や舞台での演目以外なら参加しても構わないので、どんどん輪の中に入って来て欲しいという。

7. 考察

波照間島は行事や祭祀が豊富で、波照間島の人々は信仰心が深く、神や祖先の行事をとても大事にしている。特に島最大の行事であるムシャーマにおいては、よちよち歩きの小さな子どもからお年寄りまで島民全員が行事に参加し、それぞれの成長過程に応じた役割を担っている。初めはミルクンタマ、マミドーマ、テーク、ポー、シーシという具合に成長するにつれてその演目が変化していく。おそらくポーやシーシは男の子にとってあこがれの的であり、それにだんだんと近づいていく過程の中で島への郷土愛や波照間島民としてのアイデンティティを次第に形成していくのではないだろうか。ムシャーマでの役割の変化を通じて、「これまでは演じることができなかった演目を演じられるようになる」という成長への喜びを感じ、無意識のうちに行事に参加することの必然性や、波照間島民としての自覚を培っているのではないだろうか。

だが、波照間小学校の先生方は私の仮説に必ずしも賛成ではない。先生方は、アイデンティティ形成にはムシャーマなどの行事というよりも、島での日々の生活の方が関係しているのではないかとおっしゃった。一方、島出身者は、波照間島民というアイデンティティ形成には、ムシャーマなどの行事に参加することが確かに関係していると考えている。学校の先生方と島の出身者では、どうしてこのような認識の差が生じるのだろうか。また、島出身者は全員同じ意見なのか、世代や性別によって違いは見られないのか。今後この点をより深く追求するために、波照間小学校・中学校の先生方と生徒、青年会、郷友会へのアンケート調査を行い、島の行事への参加が波照間島民としてのアイデンティティ形成に役立っているのかを調査したいと思う。